

タイからライネの声が聞こえる。ライネはさっきから浅草名物を食べてばかりだ。

「ぼくはケータイの画面を見おろして言った。

「いや、普通に顔が見えたりすれば、師匠さんだってライネのことわかるだろうけどさ。でもライネはケータイにはいっちゃってるんだよ。ケータイの中から呼びかけるだけじゃもしかしたら……」

『まったく、心配性なやつだなあ。いいか、なんてったって師匠はおれの師匠なんだぞ。ライブが終わったあとにでも、ちよいとでかい声で呼んでやれば、すぐおれのことには気がつくに決まってるなあ』

どうしてそんなに自信満々なか知りたい。ほんとにだいたいぶなのかなあ、と思いつながらあるいていると、またライネの声が聞こえた。

『しかしそれにしても師匠、なんだってアイドルなんかやってるんだろ。師匠がアイドルだなんて、似合わないすぎて冗談としか思えねえぞ』

「そうかなあ。雑誌に載ってた写真は美人でアイドルっぽかったけど……」

『美人はまあ美人だけどよ。あ、けどあの雑誌に書いてあった師匠の年はでたらめだからな。おれの星と地球とじゃ、年の数えかたが微妙に違うから、正確なところはわからねえけど、それでも師匠が二十歳前ってのァどう考えてもあり

えねえぞ。いいとこ二十代のなかばだ』

「えっ、そうなの？」

雑誌の写真では高校生くらいにも見えたけど。とりあえず、桐神鳴のことを同年代だと思いきんで応援している姉ちゃんには、このことは内緒にしておいてあげよう。

『似合わねえってのはそういう話じゃなくてだな』

おせんべいを食べ終えたライネは、今度は芋ようかんに手をつけながら続ける。

『師匠はとにかく真面目なんだよ。真面目で堅物なんだ。おれァくわしく知らねえけど、アイドルってのはきゃあきゃあ騒いで客に愛想を振りまく商売なんだろ。そんな器用なまねが、あの堅物の師匠にできるのかねえ』

王子さま相手に剣術の稽古をつけたり忍者の修行をしたりする人が、そんなに真面目なんだろうか。そう疑問に思ったけど、ライネに聞いたら、師匠さんはそれも大真面目でやっていたらしい。和の心にふれることで精神の修養をとかどうとか話していたそうだ。

『まあ、おおかた急にトロヴァオンを追い出されて、ほかにする仕事が無かったんだろ。こりゃあ早いところ連れもどしてやらねえと師匠がかわいそうだ、うん』

ひとりどうなずいているライネを見て、ぼくは小さく首をかしげた。ライネの言いかたは、なんだかそういうふう